



標註枕草紙讀本
三

特別
イ 4
3163
214(3)



貴
14
3163
214(3)

標註枕草紙讀本目次

卷三

るんぞよき物	一丁	なまめうき物	三	五節	五
無名の琵琶	九	否不替此笙	九	皇后宮の容儀	十
皇后宮の御歌	十一	ねたきもの	十二	かへはらいき物	十四
あさましき物	十五	口をきき物	十六	郭公をききふゆく	十七
第一の仰言	廿五	海月の骨	廿五	せんぞく料	廿六
ときころら	廿六	淑景舎	廿八	殿上より	卅四
二月つごもり	卅四	遙ある物	卅五	まさひろ	卅六
關ハ	卅七	森ハ	卅八	淀比已たり	卅八
湯ハ	卅九	常よりも殊に聞ゆる物	卅九	繪ふらきておとる物	卅九

枕草紙 卷三 目次

かきまさりたる物	卅九	あはまなる物	卅九	初瀬詣	四一
心つきあき物	四七	己びしげふ見ゆる物	四七	阿つげなる物	四八
まづのーき物	四八	むとくたる物	四九	修法	五十
はしたなき物	五十	關白殿	五一	あしこの露	五二
耳か草	五三	定考釋奠	五四	みまをれ成行	五四
六位の笏きぬの名	五五	月秋と期して	五七	鳥のそらね	五八
これ君	六十				



標註枕草紙讀本卷三



佐々木弘綱標註

めでたき物 六十七段

めでたきハ今ハ
 とハ心かまうて俗
 言ハヨイケツカウ
 ナキレイ大見ナ
 ちどりふまき

青色姿。花葉葉ふ。
 麴塵の袍。号青色文
 桐竹鳳凰とあり。

からふーき。 かざりだち。 つくり佛のもく。い
 ろあひよく。花ぶさなごのくさきさる藤の松ふか
 かりたる。 六位の藏人こそなほめでつけれい
 みどき君達それども。えーもきあをぬあむらり
 むねを。心よまかせてきたる。あをいろまがとる
 どいとめでたきやう。所の去う。さふーき。たごの
 人の子どもあどよて。殿原の四位五位六位も。つ

大饗の甘栗の使云
云の事、江次第よく
そし。
きぬうようハ、食應
の字、吾きん、字、拾
遣三、うくうけ
り、きやうおうとよ
むハ、とろし。

衛府なるハ、蔵入
よて衛門兵衛など
を、かねさちをりふ

かさあるこの下ようちみく、何と見えざりしも、藏
人よなりぬれを、えもいとむどあさも、くめで
たき、せんともておあり、大饗のあまくりのつ
かひな、どふまありたるを、もてな、きやうよう
志給ふさ、はいづこなりし、あまくだり入るらん
とこそおぼゆれ、御むさめの女御后おれと、ま
す、まだひめ君さ、聞ゆるも、御使よてまありた
るふ、御文とり、いろもよりうちと、あ、志とねさ
し、出る、袖ぐちや、どあけく、ま見し、ものとも
れ、が、え、ど、下、が、う、ね、の、志、り、ひ、き、ち、ら、し、て、急、ぶ、る
る、はい、や、ら、と、さ、し、し、さ、の、し、し、見、ゆ、み、て、づ、み、ら、盃、さ

我んよおわゆる
ん一本よ、つごころ
ろよ、い、う、ふ、た、ほ
ゆ、ん、と、あり、此、方
ろし。

三年四年ハ、六位蔵
入し、あるやどな
り、よ、ろ、う、て、ハ、大
方なる、悉あり、
かう、ぶ、く、え、て、お、り
ん、こと、一本、よ、か、う
ぶ、り、の、期、は、る、り、て
お、る、ご、き、わ、ど、の、ち
う、く、ま、ら、ん、ご、よ、と
あり。

し、る、ど、志、給、ふ、を、我、心、よ、も、お、ぼ、ゆ、ら、ん、ハ、み、ど、う
か、し、こ、ほ、り、べ、ち、あ、み、家、の、君、ご、ち、を、と、け、し、き
を、の、り、こ、そ、か、し、こ、ま、り、た、れ、た、ふ、じ、や、う、あ、う、ち
つ、れ、あ、り、く、う、つ、の、ち、か、く、つ、の、ハ、せ、給、ふ、さ、海、を
ど、見、ろ、ハ、ね、く、く、さ、へ、こ、そ、お、だ、け、き、御、文、か、あ、せ
給、へ、バ、御、さ、ど、り、れ、を、み、さ、り、御、う、ち、ハ、な、ご、ま、あ
り、給、へ、バ、れ、つ、う、う、ま、つ、る、ふ、み、と、せ、よ、と、せ、む
かり、れ、お、ど、を、な、り、あ、し、く、物、の、い、ろ、よ、ろ、う、て
お、ど、ろ、も、ん、ハ、い、ふ、う、ひ、を、き、も、の、さ、り、か、う、ぶ、り
え、て、お、り、ん、こ、と、ち、う、く、か、ら、ん、だ、み、い、の、ち、よ、り
は、ま、さ、り、て、さ、し、か、る、べ、き、事、を、其、御、た、あ、り、な

博士ハ儒家の弘才
有るをいふ紀傳明
経のまうちあり。

かーこき席前よりハ
天皇春宮を申さて
まつ。

つふべきよあらば
抄云至りてりでこ
き也。

ど申てまどひけるこそ口をうけき昔の蔵人を
こころ此春よりこそおきたち々れ今の世よは
ちまくらべをなんもる。まかせのぞえある
いとめでたしといふもねらるなりかほりい
とにくげよげらうやれども世よやんごとあき
物よねられかーこき御前ふちかづきおあり。
さうべき事などといせぬか御文の師よてさぶ
らふハめでたくこそねがゆき願文もさうべき
也此の序つくり出してほめらるるいとめでた
し。法師のぞえあるまどていふべきよあらば
持経者のひとりしてよむよりまあまのう中ふ

御うぶやハ後の御
産のなごを申也。
みやまどめのさね
ふハ皇后の左法を
り抄ハ獅子拍犬を
まくこまいぬと見
誤られさるひが
ことなり。
一の人ハ攝政関白
を申なり。

て時なとさごよりたる御ときやうなごになほ
いとめでたきなりくらうありていづら御とき
やうあぶらおそしかどといひてよまみたる
やど志のびやあよつげみくまよ。后のひる
れぎやうりい。御うぶや。みやまどめのさね
ふ志ーこはいぬ大志やうどるどもてまありて。
御ちやうのまひ志つらひを急内膳御へつひ
つうたてまつりやど志さるひめぎみるど聞
えしたぐ人ところを露見えさせぬね。一の人
此御ありき。春日まうで。えびどめのおりも
のすべて紫ふるいなうもくめでたくこそ何

万歳抄云六位とハ
みみくの六位ハ
あらど禁色ゆりこ
る方なるこの故
よとのわもごと
いふなり近習の儀
なり
今上一の宮ハ一条
院第一皇子敦康親
王也

なまめかききハ上
品ナイウビナ風流
ナ色メカシイナ
ソホ志なり

ま花もいと紙もむらさき花の中ふハかき
つむごどもこ〜みくきいろハめで〜六位の
とのわもごこのをかきよもむじ〜さきのゆゑ
なあり。ひろき庭ふ雪のふり志きたる。今上
一のまやまぶわら〜いよてわ〜まをが御をぢ
ふ上達部さどののやうふきよげふるふいご
かれさせぬひ〜殿上人ふどめ〜つうひ御馬ひ
あせて御覧ドあそませぬる思ふ事おいせど
とねばゆ。

なまめかききもの 六拾八段

なまめかききよげなるきんごちのふほ〜まが

むごハ村濃〜
志おりよ深〜系
なり

ひげこハ髯籠〜そ
の竹を繪の具〜
いろ〜よお〜
ろ〜深〜るなり

た。を〜げなる童女のうへのをかまなごわ
ごとふもあ〜でふころびがちふるかざみだか
りき〜くも〜ふかどか〜つけ〜がうらんの
も〜ふあふぎ〜〜隠してぬる。わのき人の
をか〜げなる夏のきちやうの志〜うちかけて
志ろきあやふ〜あお引か〜ねて手な〜ひ志こ
る。うもやうれさ〜むらごの糸志〜を〜
〜とぢたる。柳のもえたるふ青き〜うはやうふ
かきたる文つけたる。ひげこれをか〜うそめ
たる五えふの枝ふつけさる。みへが〜ねのあ
ふぎいつへはあまりあつくふりて〜もとかどふ

女院ハ一条院の母
后東三条院詮子
リ志げい舎ハ三条
院の女御定子の御
妹マて中関白道隆
公の御女マリ

えうーとらハ壁
たうてみぐくこ
とハ抄とら
かこきのくハ濱臣
云くハ木ハ板木
かくハ蝶鳥とら
板木くハを堂
る白き衣ハ画書
とら

人出させぬふ今二人ハ女院志げい志やの人や
がてとらからたうたりたつの日此あをどりの
からきぬがさみをきせぬつり女房ふだふかね
てさうもあうせぬ殿上人よいあーていみどら
かくーてさなそうどくあうちてくらうなりた
るほどふもてきてきぬあかひもいみどらうむを
びさげていみどくえうーたる志ろききぬふか
この木のかさぬおかきするおり物此からきぬの
うつふきたるハゆくとふめづらうき中ふわら
ハもいぬさうーなまめきうり下づかつあてつ
づきたちてぬらるかんたちぬ殿上人にどろき

濱臣云小忌ハ役名
ハ大忌といふもあ
りそれをつとむる
人ハ多く青摺をき
る故ふ上文ハ青
摺きとら女房とい
つり青摺の事を小
忌衣といふハ後世
マて誤まる名かり
源氏ふをみマて青
摺をぐとらもあ
りと見えたるマて
思ふへー

実方の母さう山井
ふ山藍をさうら

興ドてをみの女房とつけたりをこのきんごち
いとふめてものいひなども五せちのつぼねを
みふこぼちをかしていとあやしくて何うもさ
いとふとやうなり其夜あでいなほうらハ
こそあらぬどのをまかせてさもまどハさびきち
やうどもれほころびゆひつハまぼれ出さうり小
兵衛といふのがあかひものつけくるをこれをも
とむバヤといハバさねうハれ中将よりてつく
ろふふだぐなうとら
あーひきれ山あの水をこかまをいハなる
ひものくるなるらん

おとろ人抄にねき
な入たちとあるハ
マろしおとろき
女房ちん
宮司ろとハ中宮大
夫以下の宮司あり

ねぼろけあらざ
んハ一とかりあ
ねあよハかり

といひかく年日うき人れさるけせうのほどを
れバいひよくきまやあくん返しもせむそのか
さいらあるねとる人たちもうちまてつゝも
かくもいもぬをまづうさなどはみまもめ
てきけるふ久しくなりあけるかといらいと
さよごとかさよりいりて女房のむとによりて
さどかうはおももるなどぞさめくあるふ四
人むのりをへだてゝみこれよく思ひえさら
んよもいひよくましてうたよむと志りたら
ん人のねぼろけなうざらんハいかでかといつ
まきこそいさろくれよむ人ハさやハあるい

此哥千載集ハ初句
うハ氷とありあ
をハ俗ふあさち結
とつふそれふ水の
泡をいひうけう
結句子載ふぞうり
ぞとあれどをのあ
さよる

うとどよりハ瘡を
よめる今どもろと
いつさられま

とめでたからねどねさうとこそはいつとつま
いどきをしてありくもいとをかゝられバ
うさごほりあまむむさぶるひもなれバかざ
き日かげふゆるぶむのりを
と糸のおととつふつとへさまねバきえい
りつゝえもいひやらすなごうくとみまをか
さぶけてとふにまごうとどもりまる入のい
みどらつくろひめでたときうせんと思ひけれ
バえもいひつづけむなりぬるこそ中々まぢか
くも心ちしてよかりあわりのがすたくりさ
どにあやまといひいせぬる人をもの給ませ

そめどの、式部々
れ宮ハ村上天皇の
皇子為平親王を、深
殿式於々と申。

ろ、ゆう殿ハ仁壽
殿也。

細太刀以下二節五
節の事ハつづらば
上のちまめりき
物より、結ま入ら
なり。

しかどあるかざりむれさちて、こももよびあ
まりこそうさげなめれずひひめをさげます
れうまのかみのむきめ、そめどのれ式部卿の宮
の御おとうとの四の君の御もろ、十二までいと
をのうげふり、もての夜も、おひかづきいくもさ
わのず、やうておじゆう殿よりとほりて、清涼殿の
まへれひごのすのこより、おひ姫をさきまて、
うへの御つぼねつすおり、程をうかりき、
ほそだちのひらをつげ、きよげあるをのこ
れもて、ももいとあまめか、むらさきの
かををつみて、ふんおてふさる、ごき藤よつら

だいらハより又五
節の事を立のり
つら。

そらうの、以下
とらあらば一本
みをかうの、とど
ある、うへのざう
人のもとある、とら
とくと云くと有、
いろふハ晴るら
事をつふ、
ぬきこれハ、晚垂は
て、草紙中よ多き伺

たもいとをう、だいらハ、五節の、かど、こを、
すざろふ、只、ちらで、見る人も、をか、う、お、お、ゆ、ま、
との、もり、づ、く、さ、な、どの、色、々の、さ、い、く、を、も、れ、
い、の、や、う、に、て、さ、い、き、つ、け、る、あ、ど、も、め、づ、
ら、見、ゆ、清、涼、殿、の、そ、り、と、ふ、も、と、ゆ、ひ、の、む、
ら、ご、い、と、げ、さ、か、よ、て、い、で、あ、る、も、さ、は、づ、
よ、け、て、を、う、の、み、う、へ、づ、ら、お、ら、い、び、ど、
も、い、み、さ、き、色、ふ、と、お、も、ひ、さ、も、い、と、ら、と、わ、
り、なり、山、あ、お、日、か、げ、る、ど、や、な、い、さ、こ、ふ、い、ま、て、
かう、ぶり、志、る、を、の、こ、も、て、あ、り、く、い、と、を、か、
う、み、ゆ、殿、上、人、の、お、ほ、ぬ、ぎ、た、れ、て、扇、や、な、う、や

行事の藏人ハ舞の間乱入を禁むる奉
行くと江次第見
えり。

帳臺の試の事公事
根元ふくそ主上
常寧殿にて御覧あ
り中の丑の日なり

とひやうしふきてつらさまされど。志きをまみ
ぞたつといふうをうさひて。つぼねどもり
まへうさうほどいそぐ。そひたちたらん人
の心ささぎぬべし。かましてさそと一度ふわら
ひなどいふ。いとおそろし。行事の藏人のかい
ねりがさねも。おそろし。ことおきよらふ。見ゆ。志と
ねま。ささぎきたれど。中々えものなり。おす。女
房の出らう。さほほめそし。此ごろ。いこと事ハ
あ。のめり。ちやうごいの夜行事の藏人。いとさび
あ。うもて。な。て。か。いつくろひ二人。さ。ら。い。より
ほ。う。い。る。お。と。お。さ。へ。て。お。も。よ。く。さ。ま。ご。い

うさやみあり。抄云
藏人の詞。一人を
入るま。他のうら
やみあれ。い。う。て
一人もゆるさんと
ふ。

へ。バ。殿。上。人。あ。ど。猶。こ。れ。ひ。と。り。が。と。の。り。を。な。り。ど
の。ゆ。う。う。や。み。あ。り。い。か。で。う。や。ど。か。う。く。い。ふ
ふ。宮。々。御。う。さ。れ。女。房。二。十。人。を。か。り。た。り。こ。う。て。
こと。が。と。い。ひ。ひ。た。る。藏。人。な。ふ。と。も。せ。ど。戸。を
た。り。あ。け。て。さ。め。き。い。れ。バ。あ。き。れ。て。い。と。こ。ハ
さ。ぢ。あ。き。せ。の。あ。と。て。た。て。る。も。を。か。り。そ。れ。よ。つ
きて。ぞ。が。い。づ。き。ど。も。い。る。け。き。い。と。ね
ふ。げ。る。り。う。へ。も。お。ろ。ま。り。て。い。と。を。の。と。御
覧。お。い。ま。さ。ら。ん。う。さ。ら。う。さ。ま。ひ。の。夜。ハ。い
と。を。の。と。う。だ。い。よ。む。う。ひ。つ。る。顔。ど。も。い。と。ら
う。さ。げ。ふ。を。か。り。り。き。

さうはすひの夜ハ
卯日なり。

無名の事拾芥抄
中一条院の定子の御方へもて渡りぬへりたり。後上東門院の名物とされり。

無名の琵琶

七十段

むめやうといふびとの御琴をうつのもてつらせぬへるをえあど志てかきなすしなごよといへば引みあらびをあどをておさぐりふあてこれが名よいかふとかやあどきこえさよるふたぎいとさかなく名もなすとのしほませるるハ猶いとめでさくこそ覚えるか。

否不替の笙

七十一段

淑景舎ハ皇后定子の御妹女御なり。さりのひてハ后宮の御方へ。故殿ハかられぬひハ父君中関白の女

志げいあやるどさうりぬひて御物語のついでにまろがもとふいとをかへげなるさうのふえこそあれさどのれえさせぬへりとのぬあを僧

御へすあせぬるなり。僧都の君ハ中関白の御子隆四僧都よて皇后伊周隆家ふど御兄弟。

都のきこれそれハりうえんふさうべおのれがもとふめでさききん侍りそれふかへさせたまへと申ぬあをきくもいまたおハど猶こと事をのぬあふいらへさせ奉らんとあましたび聞えぬあよ猶物のさまハね宮の御あへのいなこのへどとねがいうる物をとのしほせらるるいみぢうをのしき事ぞかぎりあき此御ふえの名を僧都のきみもえ志りぬをさうりればださうらぬいとぞおぼしためるこれハ志きの御さうらふおハさうさときのことなり。うへの御あふいなかへどといふ御ふえのさぶらふへ御前

玄象坡馬井上滑橋
無名朽目塩竈二貫
水龍小水龍宇多法
師釘打葉二

且陽殿ハびり樂
器書籍等を置り
所あり。

ふさぶらふもれどもハ琴も笛もみるめづり
き名つきてこそあれびもハぐんぢやうほくばめい
へおさうむめやうるど又わごんるどもくちめぢ
ほがは二貫るどぞきこゆるをもろうこもめろ
ううこのほうしぐぎうちをふたつなふくれと
たほくきこえかどわとれよけりぎやうでん
の一のたるふといふうとぐさハ頭中將こそ志
こまひか。

皇后宮の容儀 七十二段

うへの御つぼねのみをのまへよりて殿上人日い
とひこふえふきあそびくらしてまのぞわう

おわとるぶら抄ふ
みとりま灯臺こと
あり。
たごまハ堅ごま
ぢやう。

琵琶行ハ千呼万喚
始出来猶抱琵琶半
遮面とあるを思ひ
てりけり。

るふほぶざごかうしをよみらぬふたほとるぢ
らをさし出さればとのあきたるがあらハるれ
びその御ことをたごはみもたせぬへりく
ねるあの御どのいふもよれつねるうちき又
まうたるもあまも奉りていとくろくつやハか
なる御びとも御どのそでをうちうけてとらへ
させぬへるめでたきにそバより御ひたひめほ
どあろくくぢあかふてわづらあええさせぬ
るハいともふべきかこやうめでたぢちかくめぬ
へる人よさしよりてぢまのバかくたりらんも
えのういあらぢうけんをれちこだ人よこ

こゝちもかきそを
彼女房ハ琵琶行を
きくち〜さ〜え。ス
一本道もあきを
とありいづれよて
もよろし。

そありけめといふをきくしてこゝちもあきをわ
りあきをわりあ〜つげいりてけいをればこら
ハせぬひて我ハ志りこりやとなんおほせらる
るとつ〜ふるもをの〜。

皇后宮ハ御歌 七十三段

御めのとれたつめのくふひうが〜ごらふた
まいもるあふきごものをのふか〜つかたふハ
日いと花やかふ〜いで〜たび入のあるとこ
ろ井手ハ中将のたちなぞいふ〜いとをか
うかきていまかたつ〜ふハ京のかと雨いみ
どうふりたるふ〜あ〜る人なぞかきたるふ。

井手の中將ハ古き
物語の名る〜。

此御哥詞花集別
入とり。

こゝちもハことお
うてぞハ新字より
ね〜やう〜。

ね〜き〜や〜
残念なる〜。

あうね〜目おむうひてもゆ〜ひいでふみ
やこい〜れぬや〜めす〜んと。

よとぞふ御手づらか〜せぬひ〜あ〜れるり
き〜みをおきたて〜りてとほ〜こそえ
いくま〜れ。

ね〜き〜や〜 七十四段

これよりやるも人のいひたる返〜もかき〜や
りつるのちもどひとつ〜つ〜おむひな
〜とみの物ぬふ〜ぬひ〜つとおもひ
て〜をひきぬきたれ〜やう〜をむ〜
〜り〜。又かつ〜ま〜ぬひ〜もいとね〜。

らよりうへさま
みぬひたる物語
南院ハ四糸の北壬
生の西あり中閑
白道隆公の居所と
まこえうり
ふれあそび美隆云
たふれのたその
脱るるまやおこや
かろくた
いらぬきの御そい
平きぬの語の錯乱
ふや平信ハ栄花を
とふ多く見えうり

みるみのみんふたひまを比おのたいよ殿
れれろすのにかふ宮もおひすせバ志んで
んふあつよりあてうりぐうればふれあそび
をわさどのふあつまりあなも志てあるにこ
れ只今とみのもはるり誰もたれも何つまりて
時かそそげぬひくまあらせよとてひらぬきの
御ぞをぬハせされをみるおまてふあつより
めて御ぞかこみづ誰うとくぬひ出るといど
みつちうくもむういずぬふはもいと物ぐ
るほ命婦のめのといととくぬひうてうち
たきつるゆぐけのかこれ御身をぬひつるがそ

御せあハせんとも
ねハ抄衣の背
を合せんとするを
り

○七字一本おき
是より

弘綱云いひまほ
のいぬの誤り
縫直一ちち

むきぐぬなるをえつけどとらめも志あへばま
どひおきてこそぬるに御せあハせんともされバ
そやうたがひよりうらひのそりてこれぬ
ひちほせといふをたれがあまうぬひうると志
りてかかほさんあやあどならぶこそうらをえ
ざらんぬひたぐへう人のけふをやあむもん
れ御ぞなりなふを志うてうかかをえ入れ
ああらんだごまごぬひぬまざらん人ふなほさ
せよとてきくもいさねバさいひてあらんやと
て源少納言新中納言などいひなほしあひか
ほえやりてめうりこそをうかりうこれ

これハよさりハ今
夜参内あるべき御
料のぬひ物と云
おかせの上よこそ
の二字ねちしるる
づ。
こそより又ねつき
物なり。

長櫃古ハ草花など
をかりて人は贈る
ハ長櫃ふ入らる事
所々ふ見えらる。

ハよさりのぼらせぬもんとしてとくぬひさるん
人をおもふとあらんとおほせらまし。
是ももどき人ふほしくやりたる文とりたぐへ
てもてゆきさるわさしげふあやまちてらりと
いさで口かきうあらがひたる人めをさるた
もさびるまどくやもうちつべし。ねもあらまき萩
ささきさるをうゑてさるほど小長びつもたる
もさすきさるむきさげてさるほりふほりてい
ぬるこそわびしうねさかりくれよらき人さ
どのあるをういさもせぬものをいみじうせい
せんたごさるいささいひさいぬるいあかひ

なわげふ物いひハ
おごりて無禮ふ物
うちしるる。

志のびて一本ふ志
ひてとあらうさよ
ろし。

あつてハ怨ドてこ
かいらみみてハふ
ままら身ふまこ
ふる。

なくねさし。ずややうなまどのきつてなめげふ物
いひさうとて我をばいかおと思ひさるげとひ
ふいひ出さるいとぬさげなり。見をまどき人
れ文をひきとりて庭ふたりて見さるいともと
びしうねたくおひくゆけどもものぬくおとまり
て見るこそとびもいでぬべきこそちまね。を
ずらなる事さるごちてたあし所うもねむみド
くり出るを志のびくひきよをれどわりなく心
ことさればあまうりよなりて人もさぶこのかり
とゑどてかいくみさふぬさのちいとさむ
きをりたごみ只ひとつきぬむそのりよてあやふ

抄云うらひひひ
よのつねねこい
をふくめさる。

かこもついでときハ
俗は笑止ナキノド
クナといふ意ナリ。

くがりて大かこみる人もねさるふさそがふた
きをらんあや志くて夜のふくるまほふねさく
ねきてぞいぬべかりくるなど思ひふしたるに
たふもとも物うちなりあど志てたをる
られバやをらまるびゆりてきぬひきあくるに
そらねしたるそいとねさるれるほこそこハ
がりのめあまどうちいひさるよ。
かたをらいつとき物 七十五段
すらうとあどにあひく物りあふおくのかこふ
うちどげごと人のいあをせいできくこち
おもふ人のいたく急ひてたを事あくる。

つうひ入るれど今
の人ならバつうひ
人なりともさとい
ふべしををつくべ
きさる。

ごえあるの字オあ
る人なり人の名ハ
古人の名なり。

きたるをもちあらで人のうへいひたるそれ
ハ何ぞかりあらぬつひ人あまどかこもら
た。旅だちする所ちかき所などうてげをど
とのざれうそしたる。よくげなるちこを。おの
まがこちちふかきとねもあまにうつく
みあそぎざれがこ急のまねよていひたる
事さどかさりたる。ごえある人のまへよてざ
えさる人の物たがえがほふ人の名をいひこ
る。ことふりともおぼえぬ我うさを人あか
りきかせて人のほめ事さどいふもかこさ
いた。ひとのたきを物ごりるどさるかこ

いとくしう一本
いとどうとあり
れよるーかるべし

あさほーきまの
奥ノサメルキモノ
ツブレルさどつ
こころさり
おののうひひろく
ゆこうあるさ
治拾遺三よあさ
しうおのめうり
いふ物のまとき
てねいりぬとあり

くらふあさほーううちとげかねたる人。やまご
ねもひきとくのへぬ琴を心一つをやりてさや
うれうた忘りつる人のまへよてひく。いとど
あうさやぬむこのさまづき所よて忘るとお逢
たる。

あさほーきまの 七十六段

さーぐーみぐくふどお物よさへそ折たる車の
うちかへされたるさうおののさる物ハとこ
ろせく久ーくなどやあらんとこそおもひしう
只ゆめの心ち志て浅ましうあやさく人のうあ
ふさづのーき事つみまなくちごもねとるも

讀詞花戦咲部達事
ハかをとりさる
山鳥今ハかうとぞ
ねいさうれける

賭弓ハ正月十八日
なり久ーうありて
ハ引さがりてさか
る間へ

くちをーきハザン
子シナクヤシイ。あ
どいふ意なり。

いひさる。かちらびきふんとねもふ人をまぢ
あうーてあうつきまごさふさだいさうかうをれ
てねいりたるにからさのいとちうくかうとさ
くふうち見あげたればひるよありさういとほ
さまし。てうをみよどうとらまはさる。むげふ
あうびんさきかぬ事を人のさうむうひてあら
がハさぶくもさくいひさる。もれうちこぼ
たるもあさほー。のり弓よまなまうく。ひさ
あうありてさうさる矢のむてさるれてこと
かへ行たる。

くちをーきハザン 七十七段

柳 結 卷 三

せちゑ一本は五節
仏名よとあるよよ
るべし。

せちゑ佛名白雪ふらで雨のうきくらふりた
る。せちゑさるべきをりの御物いみよあつり
たる。いとふみいつつとわもひつる事のさ
はること出きて俄ふとよりさる。いみどうを
る人の子うまで年比具へつるあそびをもしん
まべき事もあるふ必きさんと思ひくよびふや
りつる人のさいる事ありておどいひてこぬく
ちをす。男も女もまづうへ所まどふおれど
やうなる人ももふ寺へまうで物へもゆく
ふこのもさうこぼれ出てさういさぐからせ
あま見ぐるとも見つづくいあらぬふさる

よういさげうら
ず抄云用意ありさ
中長閑は優らうと

わびてハあま見
せまかきあ打と
びてハのころこ

五月の御精進ハ佛
道よある事うて年
三として正五九月は
精進を多事へ
ぬりごめハ帳臺の
やうふして本尊を
二間安置をる所
るるべし。

なふうーとうやハ
賀茂のおくふ鶴川

べき人の馬ふても車うても行あひ見むありぬ
るいと口をわびくいさきぐさうらんげをさ
どよても人ふかうりつべからんよてもぐかと
たぬもげーからぬをありあり。

郭公を聞ふゆく 七十八段

五月の御さうどのほど志きふおいーまをふぬ
りごめれまへふこまなる所をうとに志つらひ
志さればれいぎはならぬをさのーついでさより
雨がちよてくもまくらもつれぐなるを郭公
れ聲たづねありかばやといふをきうてくれも
くれもと出たつ賀茂のおくふなみかーとうや

枕草子 卷 三

柳 草 糸 卷

又浮橋まじりの所
有るや

北の陣抄云大内裏
の朔平門あり

馬場とつみ所河海
抄左近馬場ハ一
条西洞院右近馬場
ハ一条大宮なり

たなごころのわさるまゝよをあらでみくき名ぞ
きこえしそのまじりみまみ日ごとみまくと人
れいへむそれハ日ごとらかりといらふる人を
ありそこへとて五日のあしこやづうさ車れ
うといひて北のぢんよりささぐれはとがめを
き物ぞとてごよせて四人をのりぞのりてゆ
くうらやまがかりていま一つ志ておぼくハ
るどいへばいさとたほせられなきともいれ
どもおさけなきはよて行ふうまむといふ所み
て人おなくささぐなみごととととへハて
つぐひよてまゆみいるあり志ごと御らんとて

あきのぶのお居の
家ありとありのま
トあるうきよら
みらりの簾みくり
ハ三棧之哥ふみく
り縄とよむ俗ふサ
キヤガラ又アハビ
草ともいへりそれ
と簾の製ハ今ハふ
れがご
おまへハ皇后宮ふ
なり

たごよせとてくるまともめうり右近の中將
みかつきぬくるといへどさう人も見え六位
おどのたちうはよくハゆうからぬことぞぞ
やとさぎよとてゆきまてゆけど道もまうりれ
ころおもひ出られてをうがうの所はあ
きのぶの朝居いへありそこもやがてんんとい
ひて車よせておりぬおまのたち事をきて馬の
かとかきたるさうどあどろびやうぶみくりの
もぐれさごともさうらふむうの事をさうついで
でうり屋のさほもさかなだちてさちのくあ
さハかぢれどをうきふぐふぞかかまうと

沈 草 氏 卷 三

柳 草 糸 卷

思ふばり里よふきあひこるほとくきさとの声を
口をう御前ふきうめさびさばかりきこひ
つる人々もまど思ふ所よつけていかう事
をふん見るべきとていねといふおほくそ
りいでくわうき女どものきたあげあらぬ其わ
たりの家のむもあをんまらどひきみてきこて五
六人志てこかせ見も志らぬくるべきおほくそ
り志てひうせてうたうたいせさどさるをめづ
らしくてわらふふ郭公の歌もよんるど一つ
わされぬづから魚よあるやうなるかけぢん
かどして物くをせころを見いろく人をけれだ

くらぐきハ和名抄
蚕絲の具ハ反轉久
流閉枳とあり

あるし一本ふあほ
もとあり此方とら
し猶も出せくそん
といふ意あらべし
つきまゝしては着並
あり

家あるどつとわろくひまびたりかある所ふき
ぬる人ハようせむい何るもなまどせめいだして
こそまあるべけれむげふかくて其人なまらど
かどいひくとりとや此下わらびいてづうら
つらつらなまどいへばいかで女官なまどのやうよ
ほきるみていあらんたどいへばとりおろして
れいのそむぶいふふらいせぬへるおまへたち
かまじとてとりおろしおろふひささくぞかどふ
雨ふりぬべしといへばいそぎて車ふのるふふ
てこのうさくこふよてこそよあめといへばい
むれとらよてもなまどいひて卯花いみどくさ

枕 草 糸 卷

新編 源氏物語 卷之三

あどろハ車の細代
あり。組より物なれ
バ百を突ぬきて卯
花をさける。

近うハ皇后職の御
曹子お近くきぬれ
バなり。

一条殿ハ恒徳公為
光侍従ハ為光公の
六男公信卿あり。

たるを折つ。くろ海のさざれそばなどおなご
き枝をふきさうたれば。たごうのいながさねを。
こくおかけたるやうおぞ見えける。ともなちを
のこどももいみづくわらひつ。あどろをさへ
つきうがちつ川おこまぎしくとさあつむ
なり。人とあはれんとゆもふよ。さらおあやき
法師あや一のつあひなき者のみたまさか
お見ゆ。いと口をしちうきぬれをさりととも
いとかうてやさんやハ。此車のさばをさふ人お
かさらせてこそやまめとて。一条殿のむとあと
とめて。侍従殿やおとす。郭公の聲ききて。今

まひろげてハくら
ろぎとらみどろこ
ろささるべ。

道のまよハ道
ゆく。清お意お
て。道すうといそ
んがご。

いそがしくてのく
文字一本まき方よ
ろ。

猶わけて見よハ抄
ふ。こがく笑ふを。

なんかへり侍るといせせさる。つうひたご今ま
ある。あどきみくとなんのぬつる。さぶらひお
まひろげて。さぬきたてすりつといふおま
つづきもあらむとて。さらせて。つちみうど
さぬへやらさるふ。いつのまわりさうぞくまつ
らん。ねびハ道のまよにゆひて。志ざしくとね
ひくち。ともおさぶらひざう。きむおそうてを
しるめ。とくやれといとどいそがしくて。つち
みうどおきうきぬるおぞあつぎおどひておそ
して。まら此車のさばをいさうくわらひぬ。う
つ川の人の乃りたるとおん。さらお見えぬ。猶お

新編 源氏物語 卷之三

初巻 三

清少下て見よと
こと有ッ如し。

うへもさくハ屋根
おましく作り出らん
なり。

あう一本はあうと
もあうともあり嘆
ーさうさうすごく
帰り往んも無興
らんとあまづ。

りて見よやどわらひぬへばともなかりつる人ど
もを興どららふ哥といかふのそれまかんとの
たまへば今おすへふ御らんせさせてこそはる
どいふやどふ雨やるとにふりぬたどりこと御
門のやうふあらで此つちかどくもうへもか
くつくりそめけんといふこそいとよくけま
どいひていりて帰らんぞんこなごう海ハ只
おくれどと思ひつるふ人ぬも志らびさうられ
つるをあういんこそいとまき海ドラれとの
たまへばいざぬか内へあどつふそれも急
ぼうしよていいかでうとりやめぬたどい

すうりこれハ后皇
宮のお前清少の
帰り参りこれハな
り。
急ドハ怒恨み
うらま。

ふふすめやりふふれバがきなきをのこどもた
どひきふひきいれつ一条よりかさをもてきこ
るをさうせてうち見のへりうち見うへり此た
びもゆるゆると物うげふて如花をかりをとり
れをもももをうさうすおりたまバありさへ
などといせ給ふうらみつる人々急ド心うがり
やうのら藤侍従一条のおぼちをうすつるやど語
るふぞごなまらひぬるさせいづら歌をことハ
せ給ふがうくとけいもれバ口をの事やう人
人さどのきおんふいうでうをかききなくてあ
らん其きつらん所よてふとこそよまほしう

枕草子 卷三

柳 草 糸 卷

きき事さあつらん
の抄儀式めき
てよまんとまふ
よりて哥のおそけ
れバ無さめつらん
と云

とくいへハ早くよ
めと皇后のののん
るあり

あまよりぎき事さあつらんぞあやしきやこあ
もてもよめいしかかひなるどのこやまをまねバ
げよと思ふよいととびききをいひあをせむど
まふほどふ藤侍後のありつるりの花よつけて
卯の花のうとやうふ
ほとぎんなくねたぐねふ君ゆくときりバ
こあろをそつも忘てま
かつららんやどつぼねへまぐりとりふや
れが只うれ志てとくいへとて御まびりのふこ
ふかみなどいきてたはせされバ宰相のきふ
かき給つといふを猶そこふあといふやどふが

井どろくしうり
いみどら雷の鳴る
り

志とみをぞハ格子
のうへふ節をおろ
しとあり

入もさハ人ハ又る
り
宿世るき日ありと
倦トてん抄ふ哥ふ
縁なき日と動
ての心也といへる

きくらし雨ふりて神もねどろく志うやうたれ
バ物もおほえび只おろしおたろも志きの御ざ
らし志とみをぞみううしにまありわたしま
どひいふどふうこのつりごとともわきれぬい
とひさし鳴てまごやむほどいらくあり
ぬ只今るほその御返事奉らんとてとりかゝる
ほどふ人々上達部るど神の事申あまあり給ひ
つまむ西行もくふ出てもものさどきこゆるほど
ふやぎれぬ人もさしてえとらんこそあらぬ
とてやまぬ大うこ此事ふまかせなき日かりと
う志ていまいいのでさあんいきたりしとごに

枕草 氏 卷 三

ハわろし。

とさやぐり多過ぎ
事かいかかくおそ
く不與ある事の有
べき事ういと。皇后
ののめいするあり。
むいどの誤るるべし。

人ふきうせどなどぞわらふをいほもなと。それ
いきたりー人どものいさざらんぞれどもさせ
トと思ふよこそあらぬ。と物ーげみねぼーぬー
ころもいとをのし。されど今いささ侍らるる
よして侍らるると申す。すさまじかるべき事うハ
るどの給いせーうむやみおき。二日むのりあり
て。その日の事さどいひ出る。小宰相のきみい
おぞ手はのしをりたるといひー下わらびむ。
の給ふをきよせ給ひて思ひ出る。うとのさぬよ
とわらもせ給ひて紙のちりたるふ。
あこららびこそこひーかりけれ。

もと上句をいふ

うけたりたりやハ
おしおれてたか
りさく。藤を賞さる
事をいふれのと
まふさる。

数ものもた一本
をもてくハへたり。
春ハ冬の哥をよみ
云く。このうへ
ハひーをよみ侍
まふさるぬよハ侍

とかのせ給ひて。もとといつと仰らるふもをか。
ほのしぎたつねてきく志こ急り。
とかきてまおせたまき。いもどううけたりたり
や。かうまでだふいかで郭公れ。ことをかけつら
んとわらハせたまふも。とづのーあう。何う。お
れうとまべてよみ侍らトと。なん思ひ侍る物を。
ものれをりかど人のよみ侍るふも。よめかどに
ほせらるれば。えさぶらふす。ドキ心ちふん志侍
る。いのでうは。もどのか。むもあ。も。春ハ冬の哥
をよみ。秋も春のをよみ。梅のをりハ。菊などをよ
む事ハ侍らん。されど哥よむといもれ侍りー。

柳菰草 卷三

らねどとつゝまゝ

急む急はすう入ふまさりて其をりの歌もこ
れこそありけれさいいほどそれが子やねばな
どいもれたらんこそかひあるこもち志侍らぬ
露とりときたるかともなくてさそがふ歌がま
しく我ちと思へるさほふさいそふよみ出侍ら
んちんふき人のたぬいとほしく侍るなごまぬ
やのふけいもれはわらひせ給ひてさらばさだ
心ふまかひとれいよめともいとどとの給はも
まばいと心やましく成侍ぬ今の歌のこと思ひか
け侍らぶるどいひてある比かう志んせさせ給
ふとて内大臣殿いもうけ心まうけさせ給へ

さいその最初の字
音よてとめふと
りゝ意あり

かうろんハ庚申を

守る事之内大臣ハ
伊周公あり

り夜うちふくるほど小題出して女房小歌よま
せ給へば皆けしきだちゆるがし出まに宮の御
前ふ近くさぶらひて物けいゝなどこと事をの
こいふをおとど御らん志てなごり歌はよまで
まふれぬさる題とれとの給ふをさる事うけ給
はりてうたよむまどふありて侍まば思ひうけ
侍らばごとやうなる事誠ふさるごとやを侍る
なごのゆるさせ給ふいとあるまどき事也よ
しこと時の志らばこよひいよめなごせめさせ
給へどげぎようきうもいまでさぶらふふこと
人どもよみいごしてよしあふかどさだめらる

よりこと時清少
伊周公の詞あり
けぎようハ氣清う
よそスツカリトス

枕草紙 卷三

柳川御前
御前
御前
御前
御前

皇后の御母なる清
少をさして君との
ぬへり。

深養父の孫元輔の
むすめといえぬ
身ならまらうが今
夜の奇ハ先第一よ
よまん物をとまり

うほどふいささかなる御文をうきてたまはせ
たりあけて見れば。
もとまけが後といもろきみりもやこよひ
此うさふもらきてをを。
とあるを見うにをかき事ぞうぐひささ
やいみどく笑へど何事ぞくとわらざる
の給ふ。
そは人の後といもれぬ身なりせばこよひの
うたをまげぞよほま。
つ川む事さふらハむハ千歌なりともこれより
ぞ出まらうでこまらとけい一つ。

万歳抄云御かこが
この上ふききるお
ちますは八月十
四日の月ありき夜
云々とあまも語
重りてよろも
おがえねハ書加へ
ず。

第一の仰言 七十九段

一乗の法抄云是方
便品の文の意也寂
為第一の経るれば
彼清少の第一と思
はまん二三よてハ
あらどといふよつ

御かこく君違うへ人ろど御前小人多く候らへ
バひさの柱ふりかりて女房と物語してあ
たふ物をもげぬいせさるあけて見ま思ふべ
しや否や第一あらむバいつのがとやを給へり御茶
よと物語らどもついでふもよとて人うハ一
ふ思それむバ更ふ何ものせん只いみじうふくま
れあうせらきてあまんこよてハしぬとも
あど一よてを有んるどいハ一乗の法よりと
人々笑ふ事のもぢらわり筆紙給たりたれば九品
蓮臺の中ふハ下品とりふともと書てまおらせ

枕草子
紙
巻三

枕草子 卷三

けて人々なぞらへ
いひ一事の筋を全
皇后宮の第一あら
むいひがと仰ら
る事也。

隆家卿ハ皇后宮の
御兄弟マテ伊周公
の御弟也。

れどむげふ思ひらんトよけり。いとわるいひそめ
つる事ハ極こそあつめとの給はれバ人よ順ひ
てこそと申は。それがまろきぞかし。第一の人よ又
一よ思をねんとこそ思をめと仰せらるるもいとをかし。
海月の骨 八十段
中納言殿まおらせ給ひて御扇奉らせ給ふ。隆
家こそいみどきほねをえて侍ま。そまをさらせ
てまゐらせんとするを。おぼろけの紙のちま
ド々れを。求め侍るま。いと申給ふ。いひやうるふ
うあるとやひ聞えさせ給へ。ま。べていみどく
侍る。更ふま。ご見ぬほねのさま也。とやん人々申。

くらげのこハ増賀
上人の哥よみつん
さけやそちあま
の老の浪海月け
ねよあひまけるこ
ゑ。

信経ハ中納言兼輔
の曾孫為長の子
長徳三年正月式部
丞に任ず。

ま。ことふかむのりのハ侍らざりつと。ごとと高く
申給へ。ま。さて扇のふいあうで。くらげのなりと
きこゆれ。ま。これハ隆家がことふ志てんとて笑
ひぬ。ふかやうの事こそ。か。さほ。いたき物のう
ちふ入つ。ま。ま。と。人毎よをゆ。そと侍れが
い。ま。ハせん。
せんぞくまう 八十一段
雨のおもへふる比。ま。ふもふる。ふ御使よ。て式部
のせう信経ま。ありたり。例の志とねさ。出。さ
まを。常よりも遠く。れ。やりて。あ。れ。ま。あれ。ま
誰が。れ。う。ぞ。といへ。バ。笑ひて。か。ぐる。雨。ふ。の。ぼ。り

枕草子 卷三

初草 三

せんぞくわうハ種
褥料ニ洗足料をか
ねて戯よいへるこ
種褥ハ毛席ニ和名
抄見えり。

おなきさの宮九
條師輔公の女村上
天皇の皇后安子ニ
康保元年卅八まで
崩皇太后宮ハ贈官
あり。

侍らばあーかこつきていとふびんふきこるげ
ふなり侍りあんといへばなどせんぞくまうふ
こそいならめといふをこれハ御まへふかーこ
うおねせらるふもあゝどのぶつねがあーが
この事を申さるらまうーうばえのこまいごま
しとてかへもいひーこそをかーありしあ
まりある御身がめくれとかこゝいこく。

ときから 八十二段

はやうおなぎさの宮よ忍ぬつきといひて名
高き志もづりへなん有らる美濃守よてうせよ
ける藤原の時から藏人なりらる時下づりへど

時柄康保五年美濃
守長保二年藏人兵
部丞被補作物所別
賞と抄見ゆ。

ともど一奉まよう
てくへり。

ふみハまのの詩を
いへりげよま事
抄云是ハ時から哥
えまぬ人をねら
題出して哥のあ
て物うがせん
ていへる詞さ。

もある所よ立りて。これや此高名の忍ぬとき
なごさも見えぬといひける返事よ。それハとき
からとさも見ゆる名也。といひりらるあんか
たきまえりてもいひでさる事ハあゝんと殿
上人上達部までも興ある事ハあひらる。又さ
りらるなめりと。今までかゝいひつたあるハと
きこえり。そま又時柄がいもせらるまべて
題出しがらるん。ふみも歌もかこきといひだ
げふさる事なり。さうバだいでさん歌よみあん
といふよ。いとよき事ハといひたうまあん。おるど
うハあまこをつらうまうんをどいふほどふ。

枕草氏 卷三

初葉
三

殿ハ中岡白道隆公
うへハ北方高内侍
みて儀同三司母と
しハ是るり皇后淑
景舎さどの御親也

積善寺供養ハ栄花
見えてぬ夢ヲ撰政
殿の法興院の内ハ
別ニ御堂たてさせ
給ひて積善寺と名
づけさせ給て其御
堂供養いみじくぞ
いそがせ給ふ云々
とあり正暦三年の
ことなり

紅梅ハ表紅裏紫を
つハ十一月より二
月まで着る衣なり
故ハ早珍らししか
らねば看すしても
あらんとするこれ
ハ二月十一日の頃
なきはるなり

みざりいでさせハ
御ぐりの事御装束
など事をもみて皇后
の出たまふなり

うへひとの御車よてまありぬひよけり宮ハ御
ざうしの南ハ四尺の屏風西東ハへどて北西
ふして御たみ志とねうちおきて御火をけ
むのりまありたり御屏風の南御帳の前ハ女房
いとおほくさぶらふこなさよて御ぐしるどま
みるわど志げい志やも見奉りしやととせ給
へばまざいのでか志やくぜんどくやうの日御
うしろをわづらふときこゆれた其をくらとび
やうぶとのもとにうりて我うしろより見よ
とらつしき君ぞとのさまをすれどうきく
ゆるしさまをさりていけしうと思ふこうむいの

かこんうきむんの御ぞどもふ紅のうちこる
御ぞまへがうへハ只ひきかさねて奉りころよ
ころむいよハこききぬこそをうくれ今ハ紅
梅もきでもありぬべうれどもえぎさなどのふ
くくれお紅ハあそぬありとのさまをまきど
只いとめでこく見えさせぬふ奉りころ御ぞふ
やぐて御うちのふほひあらせぬよぞ猶こと
よき人もうくやねもますらんとぞゆのき
さてぬざりいでさせぬひぬねだやぐて御びや
うぶよそひつきてのぞくをうしろめりうしろ
めしきわどときこえざり人ごといとををし御

枕草子
卷三

柳 草 三

女房の裳なめりハ
御母多れど皇后ハ
の礼義ハ高内侍の
かりそめハ裳をか
け給へるをいふ

げふめでくハ前
お皇后の淑景舎を
うつくしき君さ
とのさまひーを
けてげふと清少の
見て思へるをいふ

こがしきふむき
てハ清少の今のぞ
く方ふむきて関白
殿のおもむきを云
折ふみてハ后宮淑
景さどの御かこち
を関白殿のよろこ
びがほふ見さまつ
るさまたり

宣耀殿貞観殿とも
よ淑景舎より登花
殿よゆく道つぎき
なり

あめらどれひろうあきこねだいいとよく見ゆら
つゝあろき御ぞども紅のさうらう二つさのり
女房のもをめりひきうけてなくほよりて東に
もてふたももれだご御ぞなどぞ見ゆるさげ
いさやも北よすこよりて南むきよれもす紅
梅どもあやここくうすくてこきこやの御ぞを
こゝあかきもさうのわり物のうちきもさぎの
くこもんのわのやあなる御ぞ奉りて扇をつと
さくかくしめりいといさぐげふめでた
うつくと見えぬ殿もうすいろのなかりも
えぎのわりもの御さぬき紅の御ぞども御

いもさうてひさの柱あうろをあてこな
ごまふむきてたうすめでこき御ありさ
まどもをうちえみてまいのさふらごとをせ
せぬふさだいなぬのえよかきたるやうふう
はくしげよてめさせぬへるよ家いとやまか
ふいまさうおとなびさせ給へる御けしきの
紅乃御ぞに自ひあせぬひて猶たぐひさいの
でうと見えさせぬ御てうまおる彼法うぬ
らせんようでんぢやうぐわでんをとほりてお
らも二人あまづうへ四人志てもてまおるあり
からびさこのさこのらうもど女房六人この

枕草紙 卷三

せげーとして、登花
殿まこをこかす
の女房つどひこれ
ハなり。
とうつぎハ重下仕
なごのむてきこ
手水をバ女房の取
つぐを云

この御方ハ皇后の
御方をいふ
番の米女ハ其日の
御手水の時役の番
よあされる米女と
いふ

りさづらふせをーとしてかへを御おくり志して
みまのへりおけり櫻のかざりもえぎこらうい
るどいみづくかざりみあぐく志りひきてとりつ
ぎまおらまといとあまめりーたり物のからきぬ
どもこざれ出てすけまごのうまのうまのむと
ぬ少將のきみ北野の三位のむと宰相のきみ
などぞちうくいへるあふをこーと見るかどふ
この御うこの御てうづぐんのおねめあをまを
この裳のうぎぬくんさいひきをどしてためて
まどいと志ろして下ばのへまどさうはぎてま
みるわどこれとておわやけ志うのうめいてを

藏人どもこハ女藏
人なり

かられ装とれ
ろの清少のせぎ
みーがうくれ野を
きを面白くとい
ていつるなり

霞の間よりハ清少
のほのかまみゆる
そのこまみゆる

古き得意ハ清少ハ
以前より知りたる

かーおをれのをアふわうりてみぐーあげまあり
て藏人どもまこのなひのかまらげてまあるとる
ほどふへごてたりつる屏風もたーあけつまを
かいまみのくうらぬみのとられさる心ち志て
あつどわびーくれぬみとと几帳との中よて様
れととよりぞ見奉るきぬのをと裳をどかき
ぬとみふすのそとふたー出されれば殿の
まののかわより御らんと出してうそや霞のま
より見ゆるハととごめさせぬふ少納言が物
ゆうーがりて侍るさくと申させぬハあれ
まづあーがまらるまきとくいをいとみくげふ

人あるをといふ意
なり。

翁女ハ、関白殿みづ
かかと北方とをさ
れてのたもへり也
女ハ、こゝハ老女の
義ヲ用ひしうまれ
バ、おむすこむむ
きなり。
大納言殿ハ、伊周公、
三位中將ハ、隆家卿、
松君ハ、伊周公の男、
左京大夫道雅の童
名なり。
所せきハ、こゝし
き意なり。

御わうごを、
伊周隆家さごの掾
み居たまへ、
白殿のれこまふを
つゝ。
おむのやどりの御
膳をたぐ所をいふ。

東宮の御使ハ、三條
院より淑景舎への
御使者なり。

御返々ハ、関白殿
御返事を旦くと淑

枕草子
巻三

むむもあども持しうともこそ見侍れどどの給
ふ御けしきいとさうりがあまう、
そのまあるうらやましくかづぐのちみあま
りぬありとくきさうめしておきま女おならし
をぶふぬへなどたぐ日ひと日さうらぶ事を志
あふねどに大納言殿、三位の中將、松君もあま
ありぬへり殿、い川しつぎさう給ひて、ひざ
おもえぬへりいとさうつらし、せきえんふ所せ
きひの御さうぞくの下がさねをどひきちらさ
まてり、大納言殿も物々志うきさうげふ、中將殿ハ
らうくさういづまもめでさきを見奉る殿を

バさるそのおてうへの御さくせこそめでさけ
ま御わうごを、
んとていそぎさうひぬとむり有て、式部のせ
うあまうところ、御使よまありこれたもの
やどりの北よりさう間よとねさう出てす
えり御返ハ、
とねもとりのいねぬなど、
りの少將もありさう御文とりいれて、わさどの
そ、
し出り御文とりいれて、
トわさも御返々ハ、

枕草子
巻三

景舎よりわ給へ
ども耻らひてとみ
しのかき給ひぬ
そつふ
ぬ折ハびまゝハ関
白殿などのみ給ハ
淑景舎より御文ま
みらせ給ふ物をと
道隆公のたはふれ
てのたまへるなり
つやうげハ淑景
舎の耻給へるさま
をいふ
宮の御子たち云々
ハ松君をかやうふ

もてあつかふやう
ハ皇后の皇子生れ
給ひてかくなりな
バと云意ありこれ
ハ正暦三年二月の
事よて一品宮敦康
親王などといまど
生ませ給ハぬ程
びんぢやう
慈道まあるハ一条
院の皇后の御方へ
入御のさまなり

ぬもぬをあらが
が見付れたるま
きぬをぬか
んぬりぬ折もま
もあく是よりぞ
聞えぬか
たうちぞ申しぬ
へぞ御おちてハ
すうあうこ
なづすうちり
ぬみぬへるい
とめでぬ
しとくあどら
へもきこえぬ
バたぐぬよむ
きてかせぬ
ぶうちのくより
ぬひてせうと
もふのせ奉り
給へぬいとほ
まうげやうり
宮の御うより
もえぎのねり
物のかうちき
えのまけし
出されれば
三位の中將
あづけぬふ
らうげぬお
ちひてちぬ
松君のをう
う物の給ふ
を誰もくう
つくしがり
きこえぬ
ハ宮の

御子たちとて引出し
うんふとろくハ侍
どか
しるどのぬも
とるをげふた
どか今までや
う事
のどぞ心もと
るきひつどの
時バのりふ
えんど
うまぬるとい
ふかどもあ
くうちをよめ
きいら
せぬへぞ宮も
こやうふう
らせ給ひぬ
やうて御
帳ふいせぬ
ひぬねぞ女房
南行してふ
そよめ
き出ぬぬり
らうふ殿上
人いとおか
のり殿の御
まへハ宮づ
うさあして
うごこのけ
のなぬと
人々急ハ
せるどお
かせうま
うとふ
みな急
ひて女房と
物いひう
そすわど
ういこに
をうと
おとひ
うり日の入
わどにた
きうせ
ぬひて山井

院の皇后の御方へ
入御のさまなり

院の皇后の御方へ
入御のさまなり

そやぐらちまけり
ハ朗詠集紀納玄の
請序ハ大度殿之梅
早意維同粉粧とあ
る廻ととりていへ
るなり。
かゝる事ハ時よあ
ふ詠吟をよふ

かゝる事ハ時よあ
ふ詠吟をよふ
ハかゝる事ハ時よあ
ふ詠吟をよふ

殿上より 八十四段

殿上より梅の花のみまちりたる枝をうれハい
ふふといひたるふふをくたちよけりとい
らへられバ其詩を志ゆ志てくろどふ殿上人い
とたたくみつるをうへの御前きうせおそま
してよるしき歌をどよみうんよりもかた
事ハまさりたりうし。よういらぶつりと仰せらる

二月つごもり 八十五段

二月はごもり風いしくふきて空いしくくろ
きよ雪をうて打ちりたるかど黒戸ふとのもづ
くさきてかゝりてさぶらふといへおよりたる

事ありてずありし
とあり。
宰相中將抄子春信
卿とあれど清
少の皇后まつりへ
て花やぎし頃ハ公
任卿宰相中將あり
へんまバ公任の君
といひて次官を
重ねいへるなりと
し。

事なりびのハハみ
やびびをひるとの
びも同じくおりの
つらまりたるまで
幸なりがらも何の
難もなきやうま
の意なり美隆のふ
此詞所々て少し

ふ公任の君宰相中將どのとあるを見れがふ
ところ紙ふいづ。

とあるハげふふのけしきふいとよくあひこ
るをこれごとくハいづつてごうんと思ひ
わづらひぬ誰々と問へバそゆといふ皆
まづりしき中ハ宰相中將の御つらへをバい
がことなるしびふいひ出んと心ひとつふら
きを御前ふ御らんせさせんとされどもうへの
おハ一まてたつとのごもりたり。ごのもづの
さいとくといふげおそくあらんちと

枕草子 卷三

づゝ意たがへり。僅言よ。ヨラスサハラズとつゝがことし。おいらかよて。さしたる事なき意。いひ。又ういづをつねをしづくりて事なきふりをせよ。意。よ。いひ。又。この如く。無難。おとりの意。よ。も。つ。ふる。り。さ。ね。ど。い。ひ。も。て。ゆ。け。バ。同。意。よ。お。つ。め。り。俊。賢。中。将。ハ。西。宮。左。大臣。高。明。公。の。男。也。

半臂ハ衣の名。緒をよて結ふものなり。

十二年の云々ハ。後撰集詞書。おぼろかな。なき。も。は。十二。年の。山。ご。も。りの。法師。の。め。お。や。と。あり。

まさひろハ。左馬権頭。時明の男。方弘也。

何よ云々ハ。人よ。かく。笑。い。ち。方。弘。よ。ハ。い。か。で。つ。か。は。る。ぞ。と。あり。

り所なきれを。さばまとして。

そらささむみ花よまごへて散雪ふ。とわな。く。書。て。と。う。せ。て。い。の。づ。見。ゆ。ふ。ら。ん。と。思。ふ。も。わ。び。い。これ。が。事。を。き。き。う。む。や。と。お。申。あ。ふ。そ。ら。ま。ご。へ。バ。き。の。と。お。が。ゆ。る。を。ど。う。の。中。将。ま。ご。猶。な。い。い。ふ。申。し。て。ま。さ。ん。と。さ。ご。め。あ。ひ。し。と。バ。り。り。ぞ。兵。衛。の。佐。中。将。あ。て。ね。を。せ。い。の。か。たり。あ。ひ。い。

さるこのたつる物 八十六段

千日のはうとそむむ日。をむひの緒ひねり。をどむむ日。みちの國へゆく人のあゝ坂の関。

こゆつやど。うまれたるちごのねとあよる。不ど。大もんよ。や。経。御。ど。き。や。う。ひ。と。り。志。て。よ。み。い。ど。む。む。十二年の山ごもりのそどめて。け。ぼ。ろ。日。

まさひろ 八十七段

まさひろハ。い。ど。く。人。よ。わ。ら。う。さ。ら。う。物。か。な。親。など。い。の。ふ。き。く。ら。ん。と。も。に。あ。り。く。も。の。ど。も。い。と。人。々。志。き。を。よ。び。よ。せ。て。な。に。志。よ。か。う。る。もの。ふ。そ。つ。の。さ。ら。う。ぞ。い。を。ね。が。ゆ。る。な。ど。わ。ら。ふ。な。れ。い。と。よ。く。も。ら。あ。ら。う。ふ。て。下。が。せ。ね。ろ。色。う。への。き。ぬ。な。ど。も。人。よ。り。ち。よ。く。て。き。た。る。を。是。ハ。

枕草子 卷三

こと人よきせむや
ハ下藝の色などの
よきが方弘よハ似
合むと人々のなる
りてつふまり。
里よとのお物とり
よハ方弘殿上よ宿
直して我里よ夜の
物とりよやるる
べし。
何でふ事とハ何事
とハあつねど唯笑
ひとりとる。

此殿上の云々ハ彼
返事かんとて墨
筆のを付けたつ
ぬるとてかくいふ
なうべし。
女院ハ一条院の御

母東三条女院より
御使よハ官の御方
よりの御見舞の使
よ方弘がゆきし也

我君こそそのこそハ
かゝり詞のこそよ
あゝず人よよ時
よつけていふ詞也
むくろごめハ軀籠
よて全身皆こそよ
へより給へとる。
除目ハ三夜おこる
はろ故其中の夜
也。
うちよきハ燈臺の

こと人よきせむやなどいふよ。ぐふぞ詞づらひ
などのあやうき里よとのお物とりよやるふ男
二人まのれとりふふひとりよとりにまのり
ふんものをとりふふあやうの男や一人志てふ
たりのお物をいひてまのりよきぞひとまのり
めふ。二ますもいるやといふを。あでふ事と志る
人もまけまどいひてうわふ。人の使のきつて御
返事とくといふを。あるやく此男也。かまどに豆
やくべとる。此殿上のよみ筆も。何もけぬもみ
かろしたるぞいひさげあうまを。りうまて
人のぬもまめといふを。又わらふ。女院なやませ

給ふとて御使おまありてかへりつらふおんの
殿上人ハふんくうほりつると人のとへだ。それ
あれおど四五人をのりいふよ。又もととへむさ
ていひぬる人どもぞありつるといふを。まわ
らふも。又あやうき事よこそいあうめ。ひとまよ
よりきてわが君こそ。まの物きこそえんまのりく人
のけぬく事ぞといふぞ。何事よのとしてきちや
うのものとふよりこれバむくろごめよよりぬく
といふを。五ついひぬめふとふんいひつるといひ
て。又わらふ。ぢまくの夜の。あぶらまのふ
とうごいのうちよきをふみてよてまのふあうら

枕草子 卷三

ハ駿河志のどハ和泉生田ハ摂津いはセハ大和常磐ハ山城神なびハ摂津浮田いは田ハ共ハ山城なり
かうだてハ加茂ハ神館の杜ありもしくハそこかと濱臣の考あり

淀のわたりいふへも橋をて舟わたりせしなり

森。ときこの森。くらぐまきの森。神なびの森。うきこの森。うきこの森。うき木の森。いもこの森。かうごての森といふがみ、とどまらうこそ河あしづれをりさどいふべくもあらむ。つひと木あるを。何ふつけたるぞ。こひの森。こころの森。

淀のわたり 九十段

卯月廿晦日つひふもせ寺ふまうづとて淀のわたりといふものをせしうら。舟よ車をかきもゑてゆくふ。あやうぶことまどの末まどく見えしを。とせしれ。いとまどのうまける。こまはこころ

高瀬の淀河内ふあり六帖ふこも枕高瀬の淀よがろことの。かろこも我ハあらでこのまん三日といふまハ初瀬も詣でハ三日めよかつまなり

なぐくりハ信濃有馬を撮津ふあり五造ハ詳ならず

物の音是も曉の管結ハ常よりこころにまこゆこなり

ふねのあまきしこそいみどりをうかりありふのせのよどふとをよみたるなめりと見え三日といふよ帰るふ雨のいこころ降りのばやうぶらとて笠のいとちひまきをきてハぎいと高きをのこわらなるものあまも屏風の忍ふいとよくふなり

湯ハ 九十一段

なぐくりれゆ。有馬のゆ。玉つくりの湯。常よりもこころふきこゆる物 九十二段
元三の車のおと。鳥の声。曉の志もぶき。物のねいこころなり

枕草子 卷三

松
鹿
鶴
三

物語よ云々源氏桐
壺よ繪よ書たり楊
貴妃のちちちハハ
みト子繪師といへ
ども筆限あれハハ
と句なりしとあらも
この趣も同じ
かきまをりも書ま
云々繪も書ま
り詞も書ま
意よく松の木より
鹿までハ画もかき
まをりし冬ハハ
じく以下ハ詞もか
きまをる物なりと
抄に見ゆ

暁のぬりのハ額突よ
て暁は御獄精進し
た人の彌勒を礼
拜するを

めさすてハ彼礼
拜の声を物隔て
聞て想像もさ哀
なりとをり
まうづる程ハ十日
精進して金峯山ハ
昔づる程を
あほうし云々ハ久
しき山ふみハ烏帽
子の損じを云
信賢ハ六條左大臣
重信公の息宣方
らげし

必しもあしくて
とら金峯山の歳王
ハ必あしやつれ
てまわれすハハ
ものるまはト也
隆光ハ三条右大臣
定方より五代左衛
門佐宣方の息なり

繪ふかきてたぐる物 九十三段
なごしこ。はくら。山吹。物づりよめで
しといひたるをとこ女のくこち。

かきまをりも書まもの 九十四段
松の木。秋の野。山ざと。山路。鶴。鹿。冬
ハハみどくほむき。夏ハ世ハあも暑き。

あまれなる物 九十五段
孝あまの子。鹿のね。よき男のわりきごみ
だけさうじあつる。つづてめてうちおこをひこ
るあまのぬのなごいもうらなれなり。む
つまじき入るどのめさすてまをるんたむ

わりまうづるやどののありま。いうあまんとつ
ほみふるふたひらうみまうでつきたるを
いとめでつけま。あほうのやまなごも
し人わろきなわいもどき人ときこゆれどこよ
るくやはれてまうづりよとこをいありたるふ右衛
門のまけ信賢ハあぢきなき事あり。つづまよき
衣をきてまうでんふなごふことかいらん。あ
らずよもあしくてよと。さうけのつまハトとて
三月つごまりにむらさきのいとこきさうぬき
志ろきあをやまぶきのいみどくおどろくとき
などふて。つづみつがよのそりれをけさるハあ

枕
草
三

枕詞 卷三

うちつゞき信賢
まうちつゞき信賢
あやしき事いやは
れど清げうち出立
をあやしむる。

たりみハ信賢筑
前の守の後任よる
りしとなり。

あまのなまきかよ云
々西行の歌は蒼夜
寒も秋のなるまよ
よよわろかこゑの

と不さうりゆく
川竹の云々抄よ夕
暮うて句曉より別
の事なりとあねど
よべてハ夕ぐまも
曉と夜と三たぐう
河竹の音のあそれ
なちをいふとの演
臣の考のちよらし
かるべし。
せく方ありてハ親
のいさめともむる
事のあるなとを云

年打過しとるハ年
の老まきとるを云
朗詠集ハ香火一炉
灯一盞白頭夜礼佛
名經云々とあり。

をいろ紅のきぬをりもどろか〜するすいりん
むのまおてぐらつゞきまうで〜りけるふ帰る
人もまうづる人もめづら〜あやしき事に
べて此山道ふ〜るすが〜此人見えざりはと
あ〜ま〜あり〜を四月晦日おかつりて六月十
餘日のやどふ筑前のか〜うせあ〜か〜りになる
ア〜こ〜そげふいひらんあ〜お〜い〜もときこ
え〜は哀ある事お〜あ〜ねどもみ〜けの
はいで也。 九月三十日十月一日のやどふ只あ
〜のなまきうふき〜つけ〜き〜り〜すのこゑ
ふと〜りの子い〜きて〜や〜る。 秋あ〜のき

庭のあ〜ぢらふ露のい〜く玉のやうおてひ〜り
〜。 川竹の風あ〜つれ〜るゆふぐまあ〜のつ
きふめさ〜〜。 夜あどもを〜て。 ねもひひか
〜〜るわのき〜んの中ふせ〜く〜あ〜て心ふ
し〜ま〜のせぬ。 山里ハ雪。 男も女もまきよげな
〜が〜ろき衣き〜る。 二十六七日を〜りのつ
〜つきふ物〜り〜てあ〜う〜て見ねぢある
うあ〜りに心がそげなる月の山のち〜ら〜く見
え〜る〜そ〜いとあ〜れ〜るま。 秋の野。 年うち
す〜〜る僧〜ちのね〜るひ〜る。 あれ〜
〜家ふ〜び〜る〜ひ〜る〜よ〜な〜ま〜ど〜た〜る〜お

枕詞 卷三

枕草子 卷三

うきうきとまきの下
まじりの字をいふも
まじりと異なりい
り

ひたすら庭ふ月のくまなくあつき。いとあらう
いあらぬ風の吹くる。

初瀬詣 九十六段

正月小寺ふことりくるハ。いみづく寒く雪がら
よ氷りくるこそをのしくれ雨などのふりぬづ
きくきふるな。いとわろし。まらせるどふまら
で。はがねあどする不どもられまのともとみ
車引よせくするふおひむらりまけるわのき法
師まのあどといふ物をまきていさくつ
はともなくおりのがるとして何ともあき経のま
しうちよみ俱舎のぶゆをまきついでいひつげあ

つみもまぐハ。少
しも恐る、さまざま
く危き事もまなくを
どいふ意なり。

わりのほろハ。清少
たちのれびるを云
かうらんおさへて
ハ。高欄は取つきて
なり。
ちが板敷などのや
うまハ。彼法師原の
やまぐゆくさまを
みていへるなり。
きぬかへさまよ云
々ハ。外の参詣の人
々のさまなり。
はうくわハ。半靴よ
て。深履の頭の短さ
をわをいふ。
うちわくうめきて
ハ。禁中のやうよて
の意なり。
うちとなど云々ハ。
内外を許されて親
しく出入をうその
ことども云。

いさくこそ。所ふつけてをのしくれわがのがらハ
いとあゆふくか。こをらふよりて。かうらんはま
へてゆく。ものを只板敷きまどのやうに思ひこ
るもをのしくつがねさつりまどいひてくつども
むてまておるもまぬりつてまよひまかア。あ
どくともあま裳からぎぬあどこむぐまくさ
うぞきたるもあり。ふうづつまうくわあどをま
てらうのふどなどくつまりいる。かうちわくり
めきて又をのしくうちとあどゆるまうれける若き
男ども。家の子など。又立違ふきて。そこもといた
ちふる所お侍るあり。あがりくるあどをへゆ

枕草子 卷三

そことハ云々道
の高下の案内を
詞にてそこハひく
き所なりたつき所
なりなどをしう
まひふ
まげハハハの若き
男家の若きとの判
とて細き

まげ心も其尊きさ
まを見るより先信
仰の心の起るを云
うちハハ内陣ハ他
所の人の奉りし燈
明のたえささなり
ふみをささげハ御
燈文をさべし源氏

玉かつらの巻ハ初
瀬よみあかし文
の事あり
ろぎちかふ抄論
義誓ふみやとあり
濱臣ハ一本ふり
礼版よ向ひ手廣き
ちかふよて手を廣
ぐる事をらんうと
いへり
なよがしの御為ハ
そねぐの立願のこ
めとあり

法師よりきて云々
ハ願文よみし法師
の清少のせとふよ
りきて所願の趣を
よく佛子申しし
やどいふをいふ

く何れおふらあらんいとちうくさうあゆみさ
いづらものおどを志づー人のねりーますふか
くそまどらぬわざなりふどつふをげふとてま
こー立たくるもあり又きつもいれむ我まら
とく佛の御まへふとゆくもあせつねおせく
ふども人のおなみたるまへをとほりゆけら
とうこてあるふ犬ふせぎれ中を見いれさる心
ちいみどくふとくなどて月比もまうでむ過
しつーんとてまづ心もおこさるみあうー常灯
ふハあうでうちふ又人の奉りつるねそるーき
までもえたるふ佛のきらしく見えぬるいみ

ぶくたふとげふてごとふふみをさうげてらい
どんおむりひてろぎちうあもほむりゆをり
みちてこれととりとまちて聞わくべくもあ
らぬふせめて志づり出しさる声々のほよとのふ
又まぎれず千とうの御心ざーハなふがしの御
ふあとわづあふきこゆたびうちうけてをうと奉
るふこにひりさぶふといひて志きみの杖を
をりてとてきたるあどのふときふども猶を
かし犬ふせぎのうさより法師よりきていとよ
く申侍ぬいくあむりこもらせぬかべきなど
とふ志のぐの人こもらせぬへりふといひきか

木村
三

あつゝの人。是も法師の我もとよこ
かりおんまゝ人の
名など語りきかせ
てかへるさまなり。
もてきつゝ。清少
の局へ宿坊よりも
てきてかすをいふ。
御供の人云々。堂
よての清少の局狭
れれ。供の人々を
宿坊へと誘ふを云。
我なり。我よりま
しむる祈禱の鐘の
音なりとききを云。

高く打出させ。彼
男の思ひやのよぬ

せていぬ。まゝいち。火をけく。物あどもてき
けくかす。もんごふ。手水あどつきて。さうひれ
手もたきまどあり。御ともの人。うの坊あなど
いひて。よびもてゆけむ。かたりく。どゆく。ずぎや
うのうねのね。我をたうときけ。このまゝ。き
るゆか。さう。ふよろ。き男の。いと。忍びや。く
ぬ。あど。はく。たち。おの。不ども。心あ。くんと。聞え
た。さ。の。い。く。思ひ。入。た。う。け。き。ふ。て。い。を。ね。ず
た。ら。ふ。ふ。こ。そ。いと。あ。れ。あ。ま。う。ち。や。も。む。む。ど
ハ。経。高。く。い。き。こ。え。ぬ。ち。ど。ふ。う。く。た。る。も。う。ふ。と
げ。た。り。た。う。く。う。ち。出。さ。せ。ま。る。き。ふ。ま。う。て。は

かをつき。経をも高
からずよむを。声く
うく。詞も出させま
ほ。と。う。り。
かれを。か。う。へ。ん。を。
い。其。ま。ま。の。珠。勝。る
う。を。見。て。彼。男。の。所
願。を。成。就。せ。させ。ま
ほ。と。思。ふ。ま。ま。
は。ゆ。う。の。有。り。し。ハ。
赤。い。は。く。は。ま。ま。ま。ま。
が。く。く。あ。あ。あ。あ。
し。と。う。り。
貝。を。い。く。う。く。ハ。昔
ハ。時。を。い。く。う。く。ハ。昔
ハ。貝。を。吹。し。る。ハ。千
載。集。ま。げ。ふ。も。又。年
の。貝。を。吹。つ。つ。れ。
ひ。つ。の。あ。ゆ。い。近
づ。き。ぬ。し。
堂。事。子。ハ。法。舎。の。時。
を。記。す。は。こ。ま。ひ。を

た。く。ど。を。げ。ざ。や。う。ふ。き。く。ふ。く。ハ。あ。ら。で。な。せ。こ
し。忍。び。て。か。く。く。く。何。事。を。お。も。ふ。ら。ん。う。れ。を
か。あ。へ。ど。お。と。く。そ。た。不。ゆ。れ。日。比。こ。ま。り。さ。う。ふ。
晝。ハ。ま。ま。の。の。ど。う。み。ぞ。を。や。う。ハ。有。く。法。師。の。坊
ふ。を。の。こ。ど。も。わ。ら。を。べ。ま。ど。ゆ。き。て。つ。ま。ぐ。あ。ふ
あ。い。づ。か。く。も。も。ふ。貝。を。い。と。く。く。俄。ふ。ふ。き。出
し。こ。う。こ。を。お。ど。ろ。う。う。れ。き。よ。げ。あ。ら。う。そ。え。な
ど。持。せ。し。る。男。の。む。ぎ。や。う。の。物。う。ち。れ。き。て。ご。う
童。子。さ。ど。よ。ぶ。こ。急。ハ。山。ひ。び。き。あ。ひ。て。ま。う。く。と
う。き。こ。ゆ。う。ね。れ。色。ひ。び。き。ま。ま。う。り。て。い。づ。こ。あ。ら
ん。と。き。く。る。ど。ふ。や。ん。ご。と。あ。き。お。の。名。う。ち。い。ひ

九
氏
三

和草紙卷之三

とろくじしきまの
とひつべけん

つもまうづる日の雨。つうふ人きまどの我をば
おがさず。何がしこそ。只今時の人きまどつみとほ
おきさる。人よりいささかみくしとおもふ
人のわいりりごとくしすづらるる物うら
こしおまてらるる。

わびーげふ見ゆる物 九十八段

わびーげふハ雅義
サウニ。ほ意サウニ
をいっふまゝ
えせ半ハ。うもあ
らぬ半をつか
けりりろハ。雨を
ほひの遊り。服車
さしと。遠をけり
西家記あり。
かゝるハ。きんぎょ
寒暑共よわひけ

六七月のうまひつどの時ばうりにきたるまげら
る車ふ。えせ半うけてゆるがしゆくもの。雨ふ
らぬ日よりむらさきなる車。ふる日よりむ
らせぬも。年老なるうらみいとさむき折も暑
きふも。げと女のさやあまきざ子をおひる。

見ゆるもの

ぜんくハ赤駝馬
馬ののりてふよ供
奉しころを云。
夏ハこれどりハ
雨はぬきて冬
やうは寒うねバ
ま。

ちひさき板屋のくらうきころげらるる。雨ふ
ぬれらる。雨のつらうらむ日ちひさき馬ふの
りて。ぜんくあつる人のかうぶりとひーげ。袍も
下褌もひとつみさうらふ。いふわびーげらん
と見えらる。夏はほれどし。

あつげらるもの 九十九段

隨身の長ハ。近衛の
番長を云ふ。
衲の袈裟の事知度
論よ委しく見ゆ。衲
ハもと袈裟の事な
りしを轉してハ僧
の事よつひて。野衲
老衲旧衲といへ
り。阿衲舎衲ハ尊者
迦葉着。敝衲衣未諸

むらぎんのをさのうりぎぬ。のふのけさ。で
みの少将。いどくこえさる人の髪多うる。
きんの袋。六七月のずほりのあざり。日中の
時さどおこさふ。又おろしああねの鍛冶。
もづらうきもね 百段

和草紙 卷之三 百八

志るくれば古本ふ
よりて改む。
秋あけりの文、つと
むつうし、よりく心
をとめて見まべき
なり。
又あはれどこの女が
れちりげり、とみ
限りし男は違へど
なり。
まづのくくもあ
ぬいさやうも信も
あぬ男も、和ぬ
いさ事も、と也。
いみじく、氣以下、
女は討して薄情な
る男のうへをいへ
るなり。
なぐりもあはれ云
い、かの字任人の
懐胎せし事も信ま
く見すつうきを云。

むとく、いせんさき
さまあしき、いさ
きるとつふも也。
かつら、いかにと
いふ女のさなり。
さうげて、いさあ
げてさつ、いり、也。
うしろ手、い手の事
のみをいへる、あ
らざうしろつきの
まなり。
えせ者ハ、威勢もあ
き主人をいふ、ま
い、役者を云。
物まんじハ、物忌し
りて、嫉妬もを云。
からま、いさハ、女の
家出して、つらこつ
う隠れ、いさを云。
こまのぬしく、ハ、拍
太獅子の誤り、うべ
いと美隆、いへり。

哀ふ心くも、げよ見捨づ、こき事るどを、いさ
う何事とも思ひぬも、いのちの心ぞとこそ、いあ
ま、いされ、さもがふ人のよさを、まもどき物を、い
とよ、いさふよ、ことふこのも、き人も、うた宮づ
りつの人さどを、うて、ひて、たがふも、あらど、
たらあり、うまるとも、まも、うて、やみぬるよ。

むとく、いさる物 百一段

汐干のかさるる大きるる舟。かみ短うき人の。
かづらとりおる、て、髪くづる程。大きるる木
れ風よ吹、ふされて、根をさく、げてよこ、いれ
ふせる。相撲のまけて、いさうしろ手。えせ者

のびざ、かんぐある。翁のいさ、いさるる、いさる。
人のちちど、のす、いさるる物、あんど、あて、か
れ、いさを、必、あね、さ、いさるる物、を、いさ、いさ、い
しも、思ひ、た、ら、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、い
も、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、い
いぬ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、い
ど、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、い

修法 百二段

修法を、佛眼真言を、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、
いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、
いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、

いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、いさ、 百三段

倭法は、後段は陀羅尼ハ、佛ハ、經ハ、なるとある例を、日本文の希の行は、かくいへば、道徳いへり。
は、さきハ、俗ハ、きまりのわちハ、不都合な、不相應な、と、いふまゝなり。
とらする折ハ、いと、下ハ、さきハ、さし、つゝ、詞を、いれ、て、いへし。
ふらとハ、俗ハ、さきハ、いと、いふ、まゝ、同じ。
い、と、い、は、る、し、ハ、泪、の、出、こ、ね、ば、さ、り、ハ、八幡の行幸云々ハ、め、て、い、は、る、事、を、見、る、時、ハ、泪、の、出、く、る、事、を、い、へ、る、ま、り、

こゝと人をいふふ裁りとしていへ出てもそのまゝ
て物とす折ハ、いと、おのづのら人のう
つるど、う、ち、い、ひ、さ、い、は、る、ま、も、さ、い、を、切、り、ま、り
人のまゝ、とりて、其人のあるおふいひ出さる。
衣るる事さ、人のいひて、おさく、に、げ、ふ、い、と、衣
と、い、ま、い、る、ま、ら、洞、の、ふ、つ、と、い、で、こ、ぬ、い、と、さ、し
た、る、お、ま、さ、づ、ほ、は、く、ら、さ、し、ま、い、と、ふ、る、せ、ど、い
と、い、は、る、し、め、で、い、は、る、事、を、ま、い、に、と、又、ま、い、ら
ふ、と、い、で、ま、い、こ、そ、出、ら、れ、八幡の行幸の、つ
らせぬおふ女院の御さ、ま、い、れ、あ、ら、う、お、御、こ、し
を、と、め、て、御、せ、う、そ、こ、申、さ、せ、ぬ、ひ、ま、い、ど、い、み

行幸ハ、一條院の行幸也。女院ハ、一條院母后、東三条院を云。女院のれハ、文字、一ハ、ま、い、り、て、補、ふ、さ、と、か、り、の、有、縁、と、ハ、還、幸、の、侍、官、供、奉、の、め、て、こ、ま、帝、の、御、有、縁、を、教、し、申、さ、せ、給、ふ、を、い、ふ、官、音、の、侍、使、と、ハ、帝、より、女、院、へ、の、侍、使、を、い、ふ、也。
隨身四人、宰相中納の召具せられ也。
さ、と、い、は、る、ま、り、ハ、女、院、の、侍、使、數、の、遠、く、こ、ら、う、ま、り、齋、信、卿、の、下、馬、し、給、ふ、を、い、ふ、也。

おくめて、こゝ、さ、ま、り、の、御、あり、ま、い、て、う、し
こ、ま、り、申、さ、せ、ぬ、お、が、世、お、ま、ら、ず、い、ま、ま、い、お、ま
こ、と、お、こ、が、る、れ、を、げ、さ、う、ま、い、ら、る、ほ、も、み、ま、い
ら、ま、い、て、い、は、る、見、ま、い、ら、ん、せん、の、御
使、あ、て、た、ま、い、の、お、れ、宰相中將の、御、さ、ま、い、ま、い、お
り、あ、い、い、こ、ま、い、と、ま、い、ら、見、え、ら、ん、只、隨身、四
人、い、み、ど、う、さ、う、ぞ、ま、い、た、馬、ぞ、い、の、細、う、ま、い、て
た、ま、い、ら、り、し、て、二、条、の、お、ま、い、ら、う、ま、い、ら、ら、ふ、お
で、い、ま、い、馬、を、う、ち、ま、い、て、い、ま、い、ま、い、ら、り、て、ま
い、と、ま、い、ら、り、お、り、て、そ、ま、い、の、み、ま、い、ら、ら、ふ、お
が、ら、ひ、ぬ、ひ、院、の、別、當、ぞ、申、し、ぬ、ひ、い、か、ら、し

木
三

室の太夫殿ハ道隆
公の弟道長公を云
ふんハは道長公ハ
なり。
少しあゆみ出させ
ハ道隆公のなり。
痛いかどかり云々
ハ赤世の善業をそ
かくんハは尊敬せ
られ給ふまやと也
かくりてだハと見
る事の重なりと云
ふハ大渡道長公傳
ふいと云々似たる
あり。
忌の日ハ齋日を云
六斎日ハ殺生を
なつ事拾芥抄よみ
ゆ。
たゞ其すハとけ
ハ其珠敷を暫し給
ハれと云々。

つくろひやもらハせぬふ宮の太夫殿の清涼
殿の中へあつてせぬればそれいゝるさせぬふ
やドきさなりと見る程ふと云々あゆみおさせ
ぬふふとみさせぬひとこそ痛いらぬりの
昔れ御ねとまひのほどさると見奉りしこそ
いづりりハ中納言の君の忌の日とて云々
しがりおこなひぬしと云々其どと云々お
こなひてめでしき身ふるんとかとてあつま
りてわらへど痛いとこそめでたれ御まふ
まことめして佛ふるりくらんこそ是よりいま
さらめとてお急ませぬふふ又めでとくさり

おまふハ皇后を云
思ふ人ハいつもあ
やまき事と感じ思
ふ人と云々と抄よ
みゆ。
九月より云々が
ハと云々をめでさ
る事赤も見えさ
り何事ぬみま
ハの筆すさいられ
と云々もめて云々
文あり。
すいかいハ遠垣を
言便よんくも也一
本すいかいのとの
文字ある事あり
らもんハ潤文乱文

てぞ見すあらする太夫殿のみさせぬへるをか
つとくまきこゆれば例の思ふ人とわらさせ給
ふまして此後此御あまよ見奉らせぬふや
うバこころりとおびりめされまよ。
あーたの露 百五段
九月ぞつり夜つよふりあつて雨のげさハ
やみて朝日の花やうふほくさふせんぞぬの
菊れ露こぶるバうりぬれくアと云々いとを
あーすいがいらんすまきなどのうへよふい
らるるものすれこぶれのつりておろふ糸もこ
えぞよふ雨れくアと云々るが云々まき玉をつらぬ

五十三

るどかきて遠近の
かやうの形し
たるを云妙は
羅文薄也と注せら
れらるわらわら
美隆いへり。
おもげありつるよ
のよ文字一本ま
ふとかみさまへハ
露よあつたるか露
のこられこれいふ
とおきあがるを云

とみるハ早速すす

きつるやうなるらそいみどうあそれおをう
くれすこくけぬまば萩るどのいとおまげ
ありつるふ露のおつるふ枝のうらうごまて人
も手ふれぬふふとかみさまへあがりたるいみ
ぢういとさうといひさること人のこくちみ
ハばゆきつらととあまふこくちみさう
れ。

耳ふ草 百六段

七日のわらまを人の六日ふもてけり
らしるどするみ見もさうぬ草をふぶゆのもて
きたるを何とくれをづいふとつとどととみ

いささどを御は
りていざ見給へ
くをささひ佳す
心さうとあまわ
ろしいや知りませ
ぬるど云てと後
よ一人の耳ふ草と
まへいふといひ
る。

つめどハ草を搦よ
つめり驚らすを
そへ菊は開をそへ
るさうり。
開いたへくまハ子
候るれハ舞の心も
まけねばるり星を
耳無の心也。
官のつらとハハ
官をつふ。
定考ハ六位以下の
人藝術行跡恪勤を

もいさぐいさるどこれのれ見あハせてみふ
草とまんいふとつふ者のあまばうべうりたり
きうぬ顔さうハさう笑ふよ又をうげある菊
の生しるをもてきくれバ。

はれどなるは耳ふ草こそつれさうね
あまこあれバまきくもまどねり

といさのわくれどまきいさるどまあらば。
定考 釋奠 百七段

二月官のはりさふかうらやうといふことする
ハ何事にあらん釋奠もいかるらん孔子さうハ
りけ奉りてする事さるべうさういとしてう人

枕詞
紙巻
三

頼ひて官壽を給ふ
をりふ。
頼真は二月上の丁
の日記子をすらす
さつふ。
聰明ハ頼真の折の
昨より。
頭弁ハ行成卿より
梅の花の云々昔ハ
かゝる物をおくろ
ふ皆本章の花を
よつけしより。
へいたんハ縁談と
かきて妻係の中ハ
鵝鴨などの子雜菜
等をりれ煮合せて
四方よきりこる物
なり。
けせん濱は云扱の
花文の脱いのか解
文るへし解文ハ
今ハ頼書の如く

ももろやよもあやまきものさどかりけりも
りてよめくもさ。
みまなれ成行 百八段
頭弁の御もとよりとてとのもづうさ繪るどや
うる物をとらきまきふつみて梅の花の
いみづく嘆くもにつけてもてきたり畫よやあ
らんと急ぎ取いれて見きバへいざんとつみ物
を二にまきべてつはみさる也くりそんさるた
てよよげもんのやうふりきて進上へいざん一
つみ例みよりて進上如件少納言殿ふとて月
日かきてみまなれなりゆきとておくに城さの

諸司より諸省へか
きあげさす下書
るり其書法目録の
書法ふ似より。
みすれのさうゆき
ハ行成々のつりり
名より。

惟仲ハ権中納言時
武の子花中弁中宮
大夫より。
うるさうてハ惟
仲皇后のや給へ

こハまづのらやあらんさるをひるハかこち
わるさとしてすあらぬ也といみどくさつりげふ
うきのみひより御前よまありて御らんぜさるれ
ばりでこくもかかれらるるさつりさる
さどがめさせぬひて御文ハとらせさまひつが
へり事ハいりぐさるんかへいざんもてと
るふも拍らどやとらすらんかへんもづれと
いふさきさつりめしてこれさうさ声つるよび
てとんどのさまよせんづりてはた弁ふ
物きくえんとさぶらひ志ていとすれをいとよ
くうるさうてきさつりあらずわさるごと也

枕詞
紙巻
三

うらと思ひてすあ
りしとすまふり
あつたハ官の所召
ふハあつたむが用
事あらうとす

上官ハ大政官の外
記史とてをいつ正
しくハ政官とかく
べきとれど古き記
録とてより上官と
もかけりと美陸い
つり

わいこう抄ハ彦道
よ道理よそむき
もとりし心なりと
あり美陸云云以て
くかちへるやうな
れと中昔のはえな
れとて字書の手紙
ハ其頃の書を書へ
合せて其字をあつ

へき也彦道とつ
事坊頃の記録と
を考ふるをさ
見えずとてふ小右
記明衡注末とて
とてさす興るま
まよ彦道といへ
事ありとれハ
もすさすきまふ
坊字をつくひと
かタン之音をタウ
とつハ龍騰をリ
リタウと云うや

つかさえはめら
るハ任官のけり
をいつ
五位もせさるハ
右位も限らば五位

こゝ坊兵少納言さどのむとよかふる物もてき
たら下部さどふいする事やあるとてハ
事も侍らす只とてめてらひ侍る何とよとせ
ゆふも上官のうちよとてえさせぬくさうとい
ハバいつづいといらふ只かハをいみじう赤
きうすやうふとづうらもてまうでこぬ下部ハ
いとれいといさうとよん見ゆるとてめでさき
紅梅よつけて奉るをすまハちおハハハハ下
部さどふとのさすハ出くるふさやうの物
ぞ奇よみ志ておこせぬへうと思ひつるふび
えくもいひたりつる哉女とて我とて思ひた

ハ奇よみぐまハとぞあるとてぬこそ語らひ
よけまよるさどよさう事いそんハうりて
無心たそんハののゆふのりとのさうやと
ど笑ひてやまハ事と殿のまふよんといとお
不うりらふよ語や中しぬひをいとよくい
ひつるとよんハののせとて人の語りし是こそ
見ざるハ我不れどもなりや

六位の勢 きぬの名 百九段

さどてはのさえとてめらるハ位さやくふさ
の御さしらのさみのすとのついでぬ板をせ
しどさうハ南東をもせさるハ又五位もせさるハ

もせつとせ
あちきるき事ども
おのちの下のよろ
づの事をいひの
しとつふよめ
まう。

るぞかごみいのみ
ぞハハ祐よ世中ハ
なぞとわらうみま
れ川みまわそめす
ぞあまづかりけふ
とけつとせと回と
いひとせまう。

袴いとあぢきまう
ハ何ぬよ袴とつけ
しよからちまき
とせり。

物ろんハ豆まぬ又
ハ豆ぶくろちまき
いてあまきくハ清
あいのいへる詞をう。

故殿ハ道隆をい
ふ。

まどりの事をいひ出てあぢきまき事どもをき
ぬるどふすろろろ名どもをつけくんとあ
やまぬの名ふふさるをぶさもらひはづ
さぞあごみいさりまごとししきわわ
のきとやうみまぞからきぬいづりまきぬと
こそいとあぢきまきとせんハとらまの人のき
もぬるれどうつのきぬれまきまじりあづし下
がさねまう又大口まづまうハ口ひろれ
ばぞうまうとあぢきまきまきまきまきまき
まぬまうハさやうの物ハ思ふくろるまきま
のさまどふらびの事をいひのさるまきまきま

まかーづまーいまいいとせねむひねとつふい
らふふふの物のいとわらうとんねむいとよこ
そ痛のさまめとふくいとむむいとさるまきま
あていひ出とつしこそまきまきまきまきまき
ねどろれまきまきまきまきまきまきまきまき

月秋と期して 百十段

故殿のいへるあま月ごとの十日清経佛くやうせ
させぬひを九月十日職の御曹ふよてせさせ
ぬふと遣部殿上人いとおろり清範講師よて
とく事どもいとあまけまごことお物の哀深
のろやどきわうまきまきまきまきまきまきまき

枕草子 卷之三

月秋と朔一てハ管
三品の句ハ南極碗
月之人月與秋朔而
身何去とあり朗詠
集奉朝文粹等よ
わたり
おけすす不ハ皇
后の御坐よ参りて
秋詠吟の事いん
とてまら

わざと以下秋信と
清かとの中の事と
いへる也

み詩ぞんじもどもさふ頭中將ののぶれ君月
秋ときりて身いづくにうとしの事をさうら出
ぬりしうバいみどうめでういづでうとお
もいいでぬひけんおいすおよわけすあ
ふどよま出させぬひてめでうあいみどうけ
うの事いひひる事を何れとのめをもれ
ばそれを啓ふとて物も見さしてさあり侍り
つる也寝いとめでうこそ思ひ侍れときこそ
さすまばさうてさお不ゆらんとねかせう
わざとよむもいぞねのづうのあふとハ
どらおろをよほふらうのハ語らひぬをぬさ

とくハ得意とく
俗にまどみと云り
因ドさうハいひ語
らふ中をとり

やくしハ秋信をほ
むらと後としてハ
たささ茶むもさ云

がふよらうさぞ思ひこらさあよあらさずとさ
りたるをいとあお志くさんざうり年ごろふ
成ぬるとくいのうとてやむをふ殿よさぞ
ふあけくれさきをいりもあらハ何事をさう思ひ出
ふせんとのぬくばさうらめさうさづき事ふ
もらぬをさうあらん後ふえらち奉らさうら
んが口をさきたらうの御前さぞよてやくと
あつまりて不めきさゆるふいのでうさおが
せうさめりさういこ心の鬼いできていひふ
く侍りさん物をさうくバ笑ひてさぞさうら
しめさめよりほのあほむるたさひたさうり

枕草子 卷之三

うひきいを引ふて。榮花物語歌合巻の喜びきハ。ちやのみりハ。梓弓君も。うひく心有り。とある。同じ後。ひいきといふ詞ありハ。此ひきをのべい。い。う。さ。り。

以兵の云。行成ハ中宮職。清めと物語し給ひ。り。り。と。ふ。け。ぬ。ハ。い。う。ふ。け。ぬ。の。誤。歎。と。美。隆。の。い。う。か。う。ハ。紙。ハ。北。野。の。紙。屋。川。と。い。ふ。紙。を。つ。ぶ。

催不されてハ。鶏小い。と。れ。て。甲。の。ま。出。し。と。さ。り。

孟嘗君の。ハ。ハ。序。と。さ。つ。と。ま。ま。と。と。さ。ら。ぬ。鳥。を。鳴。か。せ。給。へ。り。か。と。さ。り。こ。ハ。史。記。ハ。孟。嘗。君。秦。王。と。ら。ハ。れ。の。し。ハ。夜。つ。ま。さ。れ。道。れ。時。函。谷。の。関。籍。の。鳴。ぬ。眼。ハ。人。を。通。さ。す。然。る。と。孟。嘗。君。の。之。千。の。客。の中。ハ。鶏。明。と。て。鶏。の。真。似。を。う。く。は。る。者。ハ。ね。を。去。け。れ。ハ。誠。の。鳥。

とのぬふ。それぞふく。う。ず。い。こ。そ。あ。い。ぬ。男。も。女。も。げ。ぢ。う。き。人。を。う。ひ。き。思。ふ。人。の。い。さ。あ。あ。い。き。事。を。い。つ。づ。腹。も。ち。ま。ま。さ。る。が。ち。び。さ。う。ね。ぢ。ゆ。る。う。り。と。い。く。づ。の。も。げ。さ。う。こ。も。ね。とのぬ。あ。ま。さ。り。

鳥のそらね 百十一段

頭弁乃。志。き。ふ。ま。あり。ゆ。ひ。て。物。づ。う。う。ま。ど。志。の。ふ。ふ。夜。い。と。ら。ぬ。あ。す。御。物。忘。る。ふ。こ。も。ま。づ。れ。ば。う。い。ま。さ。り。ま。づ。あ。い。り。ま。ん。と。て。ま。あ。り。ぬ。ひ。ぬ。ば。と。めて。蔵。へ。お。の。か。う。ハ。紙。ひ。き。の。い。ね。で。後。の。あ。い。の。こ。り。お。ほ。つ。る。心。地。ま。ん。す。

る。夜。さ。と。ほ。く。昔。物。語。も。ま。こ。こ。さ。あ。い。の。い。ん。と。せ。し。と。鳥。の。声。も。も。ふ。ふ。さ。れ。て。と。い。と。い。み。づ。う。き。よ。げ。ふ。う。う。う。こ。ふ。こ。と。お。わ。く。か。ま。ぬ。く。い。と。あ。で。と。御。か。し。り。ふ。い。と。夜。あ。つ。け。り。ま。ま。れ。い。ま。い。ま。う。ま。う。く。ん。の。お。や。ま。ま。い。こ。え。ふ。れ。ば。と。ま。う。り。ま。う。り。ま。う。く。ん。の。み。も。と。り。ハ。か。ん。こ。く。と。い。ん。を。ひ。ら。き。て。こ。お。の。う。く。わ。づ。う。あ。さ。れ。り。と。い。ハ。逢。坂。の。関。の。事。ま。り。と。い。れ。ば。夜。を。こ。めて。鳥。の。そ。ら。ね。ハ。と。の。る。と。も。せ。よ。あ。あ。さ。う。乃。せ。き。ハ。ゆ。る。と。い。心。か。こ。き。関。と。り。侍。る。わ。り。と。き。こ。ゆ。さ。ら。か。い。

まひし何也。

此君と称すハ青騎
兵参軍王子猷種而
称此君といふ詩序
の詞より朗詠本朝
文粹等みいれり。
きつるハ期しつ
るゝて拘束せる
といふまゝなり。

同じ事とハ此君と
称すの句なり。

左衛門の陣ハ建春
門なり。

あらざるどののよまめごととるどいひあはせて
あつさりきこれハ殿ふていひきしつるほひ
もろくていなるどのつりぬひぬるどいとあやま
くこそありつきとのぬくバさる事ハ何の心
らへさうせんいと中々さうん殿よてもいひ
のゝありつきばうつもきこゝめて眞ぜさせ
ぬひつると語る。亦もらともあかつまゝおる
じ事をすんぶていとをさのゝがまばくういで、
見るどりぐ小物どもいひかきかゝつてかゝるとて
猶おる事をもろごあよずんで左衛門のら

あつさりきこれハ清か
が戦はさすすして
あつさりきこれハ清か
有るなり。

とらうすしてまハ
たとい取るして
ふとも使は跡を
き事ハかくかち
よせじとのま
皇后のおま
ふらり。
誰の事をも云
皇后の常の御心
へをいへる也。

んふ入すできこゆはとめていとと。少納言の
命婦といふが。御文すおらせたるよ。此事をけい
ふこれバ。あつさりきこれハ清か。あつさりきこれハ清か
といせぬハ。あつさりきこれハ清か。あつさりきこれハ清か
ア。あつさりきこれハ清か。あつさりきこれハ清か
らんとせバ。あつさりきこれハ清か。あつさりきこれハ清か
これがことをも。殿らんほあかりときうせ給ふ
をば。あつさりきこれハ清か。あつさりきこれハ清か

標注枕草紙讀本卷三終



